

蝉しぐれ

鑑賞日 2017・4・24

制作 2005年 「蝉しぐれ製作委員会」

配給 東宝

上映時間 131分

監督 黒土三男

原作 藤沢周平

脚本 黒土三男

出演者 市川染五郎、木村佳乃、ふかわりょう、今田耕司、緒方拳、原田美枝子

(あらすじ)

江戸時代、東北の小藩「海坂藩」。普請組の組屋敷で15歳の文四郎(市川染五郎)は下級武士である義父助佐衛門(緒方拳)、母登世(原田美枝子)のもと、親友の小和田逸平(ふかわりょう)、島崎与之助(今田耕司)らと剣術や学問に励み、隣家に住む幼なじみのふく(木村佳乃)に淡い恋心を育てていた。助佐衛門夫妻には子がいないため、登世の姉の子、文四郎を養子としたのである。文四郎は義父助佐衛門を尊敬しており、父のようになりたいと思っていた。しかし、平穏な日々は突然破られた。義父助佐衛門が藩の世継ぎの争いに巻き込まれ、反逆罪として切腹を命じられた。父の遺体を引き取りに行った文四郎は一人で荷車を曳いて帰途についた。急な坂で難儀しているとき、途中でふくが現れ、後ろを押してくれた。文四郎親子は事の真相がわからぬまま、禄高を減らされ、住んでいた家を追われ、古びた長屋に移された。その頃、ふくは江戸屋敷で、奥に勤めることになった。ふくは別れを告げに文四郎を訪ねてきたが、文四郎が不在のため会えず、江戸に旅立った。

1年後、義父助佐衛門の旧友藤井宗蔵の計らいで元服が行われ、さらに翌年、義父を死に追いやった家老里村から呼び出しがかり、出向くと旧禄に復し、郡奉行を命じられ、住まいも与えられた。ある日、学問の修業を終えて江戸から戻ってきた与之助からふくの話聞いた。ふくは藩主の手が付き、身籠ったが流産した。しかし、再び藩主の子を妊娠し、出産して今は樺御殿という藩主の別宅に身を隠しているという。数日後、文四郎は里村から呼び出しがあり、ふくの産んだ子を攫ってくるよう命じられた……

(解説)

原作に惚れこんだ黒土三男が、映画化を志してから15年がかりで映画化に挑み、その執念が実を結んだ力作である。東北の小藩「海坂藩」の青年武士、牧文四郎は藩の勢力争いの犠牲となった父親を亡くしながらも、剣を磨き、学問に励み、懸命に生きてきた。その清々しい生き方が観る者の胸を打つ。藤沢周平の原作について、解説を書いた文芸評論家の湯川豊氏は「まれにみるとしかいいようのない、青春小説である」と記している。文四郎、逸平、与之助の幼なじみの三人の友情の絆は強い。映画の主題もお家騒動より三人の生き方に重点を置き、文四郎とふくの淡い恋心は自分たちの置かれた境遇のなかで美しく開花する。冒頭のふくが蛇に中指を咬まれ、文四郎がその咬まれた中指の傷口を吸うシーンの二人の心情は映画の柱の一つになっている。だから、義父の遺体を文四郎が荷車に乗せて一人で曳いて帰る際、ふくだけが後ろから押してくれたことも、文四郎は忘れられない。藩主の側室と藩主の家臣という身分の違いという境遇のなかで、ひととき、二人の心は結ばれる。これも青春小説である。登用された市川染五郎、ふかわりょう、今田耕司、木村佳乃ら若手俳優陣がしっかりと演じ、期待に込めている。